フィールディング管見—あの世への誘(いざな)い

能　口　盾　彦

—I—

いつの時代にも，文人墨客に遺作はつきものである。志半ばで昇天した若き芸術家，功名遂げた文壇の大御所にも形見の作品は残される。遺稿，遺作が家族や友人たちの協力を得て，日の目を見た例も少なくない。Henry Fielding (1707-54)にあって，*The Journal of a Voyage to Lisbon* は，まさにその例で，1755年2月に公表された。勿論，"A Fragment of a Comment on Lord Bolingbroke's Essays"も『リスボン渡航記』の補遺として併せて編纂された。洋上で，また異国の地で絶筆となった作品を認めるフィールディングの心境は如何に。諸々の疾患に対して殆ど為す術無き現実を前にして，凡人は故国を離れる覚悟も無く，気息奄々，悶々と過ごすが世の常であろう。リスボンへの船出がまさに死出の旅となったフィールディングの心に，再び母国の土を踏めまいとの不安が一瞬たりとも去来しなかったと誰が断言出来ようか。持病の痛風に加え，晩年は黄疸や喘息に水腫 (dropsy) と，満身創痍のフィールディングが，気力を奮い立たせて海外に転地療養先を求めたのは，国内での治療の限界と，馬車での難行より海路をとった折衷案に依るものであろう。渡航に先立ち，*The Life of Mr. Jonathan Wild the Great* の改訂版を1754年3月に出版し，翌月末にはミドルセックスの治安判事を辞し，盲目の異母弟 John に後任を委ねる等，フィールディングが身辺の整理をはかった事が判明している。一方，『リスボン渡航記』の序文(Preface)等からは，Joseph Addison (1672-1719) の旅行記や Samuel Richardson (1689-1761)等への対抗心に溢れ，小説家としての自負心が漲り，フィールディングの旺盛な創作

意欲が感じとれる。そこには死への恐れや憧憬などは微塵も感じられない。豪胆なフィールディングが死を忌避し，ことさら覇気に富む姿勢を貫いたとする見方もある。ところが，同書の前置き(Introduction)から，家族を抱えて余命幾許も無き我が身を慨嘆し，藪医者達の処方に身を委ね，後顧の憂い無き様に努める家庭人の一面も見てとれる。医者の勧めるままにタール水を飲み，はたまた，套管針（trocar）により，水腫治療を受けたと彼は述懐する。それにしても，14クォート（約16リットル）の腹水を取ったとあるが，俄には信じ難い。同時代の文人，例えばLaurence Sterne（1713-68)同様，[1]“刺絡”に代表される当代の医学，医療への不信の念をフィールディングも隠さなかった。当時の医療，医術の類は科学的な裏付けに欠け，迷信ごとき処置が横行し，疫病の流行を前に，座して死を待つしか無かったと言うのが実情であろう。文学史を繙いてみても，例えば，『デカメロン』はペストの流行と民衆の畏怖の念を，加えて，当時の公衆衛生法の一端である隔離検疫の虚しい実態を浮き彫りしている。英国にあって，かのSamuel Pepys(1633-1703)の日記は，野火の如きペストの流行を前に，恐怖に戦く筆者の心情をいみじくも露呈している。豪放磊落なフィールディングではあったが，母国を後に旅路遥かポルトガルを目指し，錯綜する思いを込めて渡航記を記述した事であろう。航海中の陳述は愚痴に終始すること無く，その毅然とした筆使いから，達観した心構えすら感じとれる。彼が死を如何に捉えたか，リスボンへの洋上で初めてその境地に達した訳ではあるまい。フィールディングが小説家として緒についた1740年代始めの作品にもその糸口となる箇所が見出だされるのではないか。

フィールディングはリチャードソンが1740年11月6日に発表した *Pamela, or Virtue Rewarded* に啓発され，小説家の道を志すようになったことは文学史の教えるところである。事実，1741年4月4日 *An Apology for the Life of Mrs. Shamela Andrews* を，1742年2月22日には *The History of the Adventures of Joseph Andrews, and of his Friend Mr. Abraham Adams* を，いずれも

匿名出版により公表している。次いで1743年4月12日に *Miscellanies* を従来同様，Andrew Millar により予約出版（556セット）し，ここに小説家としての名声を確立した。『パミラ』のパロディーとして端を発した『シャミラ』や『ジョウゼフ・アンドリューズ』にあって，主人公達の死が考えられないのは当然である。ジョウゼフの主人である Booby 氏の死はブービー夫人の登場に必要不可欠であることは申すまでもない。その他，諸々の作品にあって，端役的登場人物の死が随所に挿入されるが，作者の死観を垣間見る事は出来ない。むしろ勧善懲悪に終始すると言ってもよく，死の鉄槌も珍しく無い。その事は1749年2月28日に世に出たフィールディングの傑作 *The History of Tom Jones, a Foundling* における Blifil 大尉や Thomas Square の死に代表されるのではないか。死を扱う際の作者の諧謔精神は，『ジョウゼフ・アンドリューズ』第4巻第8章で，アダムズ牧師が若きジョウゼフ達に平静さを保つように説くが，我が子の水難の報を聞くや，大仰な悲嘆に暮れるが，我が子の無事を耳にするや，一転，狂喜するといった場面に例証されるであろう。同書後半部でのアダムズ牧師は主人公と言ってよく，巻末での同師の死は論外である。ところで，フィールディングの作品で，主人公の死をもって物語が始まる作品がある。『ジョウゼフ・アンドリューズ』が出版されて程なく発刊にこぎつけた『雑文集』第2巻に納められている *A Journey from This World to the Next* が，それである。

—II—

『あの世への旅』の発端は，1741年12月1日に生を終えた本編の語り手である「私」の肉体から霊魂（spirit）が抜け出て，黄泉の国へと旅立つ場面である。序文（Introduction）による物語の設定に反し，時間設定が現実と近接過ぎると考える読者に対し，作者は脚注を設け，読者の判断に委ねると結んでいる。ロンドンは Cheapside の下宿屋より主人公はあの世へと旅立つ。先ず，マーキュリーの先導で Newgate 近くの Warwick-lane に出向く。そこで

乗り合い馬車に乗り込み，死出の旅に立つ。相客の死因は当時の医療や社会の実態を示唆している。決闘死の男性，舞踏会で拗らせた風邪がもとで熱病で亡くなった美形，死因が熱性疾患（distemper）らしい曰くありげな婦人，天然痘を恐れる余りロンドンを忌避していたが，久方ぶりに上京し，不覚にもカラス貝（mussel）の飽食で落命した商人，医者の処方ミスで亡くなった男等々。不衛生で怪しげな民間療法の一端がそこに窺える。乗客達が語らう中，Hague にも似た悪臭漂う the City of Diseases に到着する。コベント・ガーデンの佇まいを思わせるこの都市で，各自は病の処方箋を受け，再びコーチの客となる。やがて the Emperor of Death の居城である the Palace of Death に至る。ゴシック風の建物が Marlborough 公爵(1650-1722)の館 Blenheim を思わせる，と本文にあり，軍人嫌いのフィールディングが同地でのマールバラ公爵の所在，処遇を曖昧にする事から，父 Edmond が名将配下の将校であったとか，母 Sarah の従姉妹 Mary Gould of Dorchester が公爵の弟 Charles Churchill 陸軍大将と結婚した故等，と憶測を呼んでいる。事実，1741年1月にフィールディングが公にした詩“Of True Greatness”ではマールバラ公爵賛辞が歌われている。“死の館”では，*Gulliver's Travels* 第3編を思わせる偉人達の登場，即ち，ルイ14世，スウェーデン王シャルル12世，マケドニアのアレキサンダー大王等の姿を主人公は目にする。死の館では瘰癧の処置を思わせる王の御手に接吻する栄誉を得た後，一行は“死の館”を後にさらに馬車の旅を続ける。やがて大河(Cocytus)の畔に到着し，馬車からボートに乗り移り大河を渡る。対岸に上陸以後は徒歩で辿り，その間に語り手は公爵と従者，賢者，乞食，国王等と出会う。ようやく Minos の守る極楽浄土（Elysium）の門へと辿り着く，と言うのが物語の前半部の粗筋である。但し，主人公の旅は *Pilgrim's Progress* における Christian の道程ほど波乱万丈とはならず，面白みに欠ける嫌いは否めない。本来，黄泉の国へはボート等で海路はるかに辿るというのが西欧流と思われるが，ステージ・コーチをロンドンから出立させる設定に，フィールディングの着想の妙がある。わが国

では，死者の霊魂が辿る道，さ迷う世界を冥途，或いは冥土と記し，黄泉，冥界等と言われ，三途の川，塞の川原等が在ると信じられている。死者がゆく黄泉の国への旅という特異な物語形式も，フィールディングの独創ではなく，彼が愛読した *Dialogues of the Dead* の作者であるギリシャの諷刺作家 Lucian(117-180)の着想を借用したらしい。[2]

冥界を支配した閻魔王とは，サンスクリット語 yama の漢音訳で，閻魔と地獄とは同様の概念としてわが国には伝わり，生きとし生ける者の罪を監視し，死者の罪を判ずる冥界の主である。同様の概念が西洋にも在り，ミノスとして知られる。ミノスとはギリシャ神話に登場し，Zeus とチュロス女王 Europa の子。クレタ島の古都 Knossos に住み，ほぼ全島を支配し，アテナイを征服。ミノス王の妃パシファエが牛と情交して生まれた人身牛頭の怪物 Minotaur を閉じこめるため，名工 Daedalus に迷宮 labyrinth を造らせた。その後，王にうとまれて迷宮に幽閉されたダイダロスは，その子 Ikaros と共に飛行翼を作りクレタ島から逃亡。ミノス王はダイダロスを追ってシシリアに行き，カミコス王コカロスの娘達に殺害され，死後，黄泉の国で裁判官を務めたと言う伝説のクレタ王である。フィールディングが描出するミノスが霊魂達に下す裁定には3通りある。極楽浄土入りを許可するか，冥界下の深淵(Tartarus)へ落下させるか，或いは来た道へ押し還すか，である。ミノスの裁決に作者の哲理が反映されると解釈可能だが，ミノスの尺度の根幹は慈悲心と善意に則っている。罪深い犯罪人がタルタロスへ落下するのは至極当然だが，美術品愛好者である蝶の収集家，身持ちが固い美しい乙女，愛国者，指揮官達が逆戻りさせられる。語り手である「私」は，青春の常として，一時放蕩生活に耽ったが，他人を傷つけたこと無く，善行を為すこと怠らず，と弁じると，ミノスは咎める事無く極楽浄土への門を開かせる。この件は，若気の至りとするトム・ジョウンズの弁疏を思い起こさせるであろう。現世での義侠心と反省もミノスの裁定基準とする点に，作者の道徳訓が反映されていよう。ミノスの当意即妙たる応答は奇想天外で杓子定規に陥ること無く，滑稽ではあ

るが，偏向の嫌いが無くもない。

例えば，慈善院に気前よく寄進したと申し開きをする男はミノスに“見せびらかし”(ostentation)と一喝されて戻される。教会に日参し，暴飲暴食や女狂いにも耽らぬ謹厳実直な男が，私生児をもうけた息子の廉故，彼の相続権を即刻抹消したと申し出ると，“... for such an unnatural rascal shall never pass this gate.”[3]と極楽浄土入りを拒まれる。ミノスが人間性を問題にするかと思えば，minuet 踊りが得意の伊達男には，娑婆は伊達男の特技を必要とする，との見解を下す。ロンドンから語り手と同行する婦人に対し，極楽浄土に気取り屋は一人も実在せずと申し渡す。公爵と名乗った威厳ありげな男には“you are infinitely too great a man for Elysium;”[4]とばかり，足蹴を食らわす，と言った具合である。かかる男女に対し，極楽浄土に彼らの占める余地無しとのミノスの裁定に，官職や爵位，金銭への蔑視に終始するかと思えるのだが，先のロンドン市長の霊がおもむろに一言発すれば，たちまち極楽浄土の開門が成る例も見られる。ロンドン市長とは1741年3月に執務中に亡くなった Humphrey Parsons であることはほぼ間違いない。[5] 特定可能な人物も含め，ミノスの裁定には気紛や偏執さが指摘されよう。こうしたミノスの偏狭な姿勢は，軍人の霊魂達への偏向した裁定にも窺える。極楽浄土入りを果たし得なかったフランス王ルイ14世，スウェーデン王シャルル12世，マケドニアのアレキサンダー大王等が“死の館”に止め置かれる事実からも明らかであろう。国家のために戦死したと自認する指揮官が，極楽浄土への入園を許可されようとする。だが，命令を受けた兵の務めとして，敵国の諸都市を焼き滅ぼしては掠奪したと述べるや，ならば我が命を聞けとばかり，ミノスは彼を部下共々，もと来た道へ戻させる。愛国者に対しては，ミノスは限り無き尊敬の念で極楽浄土に送り出そうとする。ところが，ミノスの自分への敬意を不十分と申し立てる愛国者に対して，“I am sure you will not decline it; for I am certain you will, with great readiness, sacrifice your own happiness to the public good.”[6]と，愛国者の自己存在の矛盾を突く。ここ

で思い起こされるのは，後年，即ち，1745年のジャコバイトの反乱を契機に，フィールディングが *The True Patriot* を同年11月に創刊し，翌年6月まで都合33号のパンフレット編纂に当たった事実である。フィールディング自身は英国国教徒，厳密に言えば，広教会派の信徒であり，ハノウヴァ王朝支持者と考えられていた。[7] 愛国者の有り様は如何にあるべきか，との証左をミノスの判例から即断し得ないが，死後の世界での愛国者の存在，愛国者を裁く視点に奇抜な着想の妙が見られる。軍人為政者に対するフィールディングの従来の扱いから，Oliver Cromwell (1599-1658) の処遇は興味溢れるものであるが，地獄を見たとするクロムウエルの告白で赦免が適うのは，アレキサンダー大王等の処遇を比べ，いささか合点が行かないのは論者のみか。

ミノスは聖職者に対してもその非を問う。餓死した見窄らしい風体の御霊達がミノスの前に進み出る。彼らの窮状を証言した教区牧師が，率先して門へと歩むが，“no man enters that gate without charity.”[8] とミノスに押し止められる。この逸話から聖職者の“清貧さ”が作者の宗教人の高潔さを知る重要な尺度と測る事が出来よう。そこにフィールディングの私見が強く投影されているのではないか。フィールディングが抱く聖職者観は，1740年3月から4月にかけて，彼自ら主宰する *The Champion*（週3回発行の新聞）に，“The Apology for the Clergy”という題目で寄稿し，4月5日版では理想的な牧師像10ヵ条を挙げている。その最終条項に“The last qualification which I shall mention, and which is peculiar to the clergy, is poverty.”[9] とある事から，宗教家が清貧に甘んじるか否かが，フィールディングの聖職者への判断基準と解釈出来よう。副業の養豚業に専心する Trulliber 牧師は，エンクロウジャーに専心没頭する18世紀当時の聖職者の拝金思想の権化であり，アダムズ牧師こそ，フィールディングが描く貧乏田舎牧師の典型であることは間違いない。[10] ミノスの拒否にあった教区牧師の言動に，当時の英国の管轄区での牧師の実態，有り様が反映されているのであろう。

—III—

『あの世への旅』は全3部から成る。第1部は第1巻の最初の9章で，語り手の死に続き，黄泉の国への旅，道中で史上の人物と語り手の出会いから成る。第2部は第1巻第10章から25章迄を占め，極楽浄土で語り手が背教者Julian（F. C. Julianus）と出会い，ユリアヌスが語る流転に満ちた遍歴話から構成される。次いで意図的な欠落部が存在し，直後の唯1章，即ち，第19巻第7章のAnne Boleyn(1507-36)の身の上話が第3部を占める。物語は語り手の旅とミノスの裁定，ユリアヌスの転生が織り成す小作品ではあるが，恣意的な欠落部を挿入させた為，古典的手法に則るとされる。古典的との所似は，文具店に置き忘れられた古い原稿を作者が見出し，友人のアダムズ牧師の点検を経て『あの世への旅』は日の目を見，文具商が包み紙代わりに古い原稿用紙を使用した事から，欠落部が生じた，との陳腐な便法ゆえである。更に，第3部を構成するアン・ブリンの章にあっては，フィールディングの実妹Sarah(1710-68)の執筆と信じられている。[11] 従って，物語り後半の中心はユリアヌスの遍歴に在る。コンスタンチヌス1世の甥であるユリアヌスは，361年から363年にかけてローマ皇帝となった実在人物で，“背教者”ユリアヌスとして知られている。新プラトン主義に引かれたユリアヌスはキリスト教の信仰を捨てて異教，密議教に改宗。ギリシャ語で書かれた『キリスト教徒反駁論』からも分かる様に，キリスト教徒の反抗に手を焼いた皇帝ユリアヌスは彼等を徹底的に弾圧した。こうした史実がユリアヌスに背教者の烙印を押させしめたのであろう。フィールディングが物語りの中心にユリアヌスの脱線話を挿入した真意が奈辺に在るか，憶測の域を出ないが，宗派を問わずキリスト教徒にとってユリアヌスの名が有する意味は大きいのではないか。ペルシャ遠征で破れ，敗走中に殺害されたユリアヌスの霊魂が如何なる遍歴を辿るかは，キリスト教徒のみならず，広く読者の関心を呼ぶ事であろう。ユリアヌスの苦渋に満ちた道程は，彼を直ちに地獄に失墜させるより，この

世で苦行に仕せることを罪の贖いとする作者の解釈に依るものと考えられる。事実，ユリアヌスの遍歴は以下の如くであり，その霊が宿る人物の職種は多岐に渡る。

> However, he had been denied admittance, and forced to undergo several subsequent pilgrimages on earth, and to act in the different characters of a slave, a Jew, a general, an heir, a carpenter, a beau, a monk, a fiddler, a wise man, a king, a fool,...[12]

幾多の人物の肉体に宿ったユリアヌスが，艱難辛苦の果てに，漸く大主教（archbishop）の姿を得て極楽浄土入りを果たす。彼が姿を変えたHugh Latimer (1485?-1555) とは，英国の宗教改革者で，異端者として火刑に処せられたWorcesterの主教である。ユリアヌスをラティマーと転生させるフィールディングの意図は，背教者と異端者の認識の程に暗示されるが，そこに確たる必然性は窺えない。全般的に，ミノスの裁定に示唆される作者の訓戒はご都合主義と言えまいか。フィールディング研究家Simon Vareyは“Fielding is not concerned with the famous aspects of Julian's life... The narrator of chapters 10 to 25 could be anyone: only the chapter headings remind us that his name is Julian.”[13]と，ユリアヌス登用の必然性に疑問を呈している。同様の観点から，Homes Duddenによる『あの世への旅』解釈はまさに至言と言えよう。

> It seems evident that Fielding commenced his tale with enthusiasm, but, in the course of recounting the metamorphoses of Julian, lost interest in his subject, meandered on for a while without any clearly defined design, and at last gave it up as a bad job. Nor did he after-wards take the trouble to round off his story with an artistic conclusion. He merely clapped on at the end the narrative of Anne Boleyn—which may have been originally a short independent piece—

and left the work a fragment. To excuse its unfinished condition, he adopted the not uncommon literary device of pretending that the printed book was but a portion of a larger work, most of which had been destroyed.[14]

閻魔大王然としたミノスの裁定同様，ユリアヌスの転生とその顚末に，さしたる蓋然性を見出せない。ユリアヌスの流転を展開するフィールディングの意向は，背教者の末路を宗教的な視点から呈示するよりは寧ろ，英国国教会所属の聖職者への変身に読者の関心を呼び覚まそうとする作者の便法と解釈出来よう。

—Ⅳ—

フィールディングによる『雑文集』は1743年4月に発刊を見たが，同書に編まれた『あの世への旅』の執筆時期は1742年2月に出版を見た『ジョウゼフ・アンドリューズ』と相前後するものと推定される。その根拠として，同じく『雑文集』に納められている“Of the Remedy of Affliction for the Loss of our Friends”との脱稿経緯が挙げられ，同小冊子の契機は1736年に生れ1742年3月に夭折した長女 Charlotte の死が引き金と考えられる。[15] 時間的な近接もあって，長女との関係が『あの世への旅』に挿入され，語り手は極楽浄土入りを果たした直後に娘との再会を果たす。この感激の出会いは作者の情緒の一端を物語り，語り手とのアイデンティティの一致を示唆する場面と考えられる。[16] 無論，死後の世界での時間概念をこの世の時間帯と符合させる理不尽さを忘れてはなるまい。『あの世への旅』の語り手が1741年12月１日にロンドンを旅立つとあるが，別途に極楽浄土入りを果たした先のロンドン市長パーソンズが1741年3月に亡くなっている事から，『あの世への旅』の執筆時期は1741年4月発刊の『シャミラ』出版以後，『ジョウゼフ・アンドリューズ』脱稿以後と考えるのが無難であろう。フィールディングの諷刺の対象であっ

たRobert Walpole (1676-1745)が1742年2月には権力の座から降りた事実と併せ,『大盗ジョナサン・ワイルド伝』はともかく,『あの世への旅』では元宰相への言及無き事実を考え合わせると,『あの世への旅』は1741年の暮れから執筆され,途中『ジョウゼフ・アンドリューズ』発刊や妻子の病気看護等に追われた事,同書継続の意欲が萎えた事もあって,未完のまま『雑文集』第2巻に編入されたと言うのが実情ではなかったか。[17]『雑文集』出版に際し,諷刺の対象として元宰相を扱う意義が消滅したと考えられ,一部に加筆・訂正が施されたにしても,全面的な改作には時間的な制約があったものと推定される。いずれにしても,フィールディングが周到な準備の上で着手したとは考え難く,予約注文を募った手前,草稿を取り纏め,急ぎ編纂したものと考えられる。構想の不統一や物語の展開に拙速さが読み取れるのも,この辺りの事情を反映したものであろう。[18] 果たせるかな,『雑文集』に納められた『大盗ジョナサン・ワイルド伝』が1754年3月に改訂出版され,その際,Heartfree等の件が書き加えられた。病魔と戦いつつ,多忙を極めたこの期にフィールディングが敢えて改訂作業に手を染めた事から,作品の不備,諷刺の風化を従前より懸念していた事が分かる。ハートフリー夫人の脱線話は,アフリカ沖で難破遭難したヒロインの波乱万丈の物語で,架空とは言え,現世の流転であり,転生の形式を踏まないのは当然である。だが,物語の進展具合や構成面より,『あの世への旅』でのユリアヌスの遍歴をめぐる作者の姿勢に共通点が認められる。勿論,内容面からの類似性,近似性を指摘し得ないが,ハートフリー夫人の流転と彼女の貞操をめぐる攻防話は,放浪中の体験が物語の進展を成すピカレスク小説の形式に則ると言えるのではないか。当初,語り手に物語の展開が委ねられる『あの世への旅』であったが,ミノスと語り手,ミノスの裁定からユリアヌスの転生へと主題の移行が図られた結果,主筋と副筋の区分は消え,止め処無きユリアヌスの遍歴話への展開を残すのみとなった。ユリアヌスが異端者である史実と,ミノスの許可を得る辻褄を如何に計るか,整合性を何処に置くか,作者が最も熟慮を要したところであろ

う。ユリアヌスの苦渋に満ちた足跡を辿ると，フィールディングの意向が解明できるのではないか。ユリアヌスの遍歴で，3度，彼は聖職者に転生を果たしているが，同一職種が繰り返される例は牧師をおいて他に無い。3度目に英国人の牧師，ラティマーの姿を借りて極楽浄土入りを果たした事で，作者が休筆処置を決めたのも当然の結末であろう。

ユリアヌスの遍歴はハートフリー夫人の脱線話同様，社会各層の異国趣味を考慮したフィールディングの作為の結果と解釈可能である。18世紀当時にあって，John Hadley (1682-1744) の六分儀や，John Harrison (1693-1776) による改良型経線儀，加えて，正確さを増した海洋地図等の出現に依る航海術の発展から，知識人の地理への関心が生れ，英国民の海外熱，異国への憧憬は一層の高まりを見せた。フィールディングに先立って，アディソンや Richard Steele (1672-1729) などの活躍によって確立されたジャーナリズムによっても外国紹介が計られ，見聞録が数多く出版された。[19]『ガリバー旅行記』は言うまでも無く，Daniel Defoe (1660?-1732) の *Robinson Crusoe* や *A Tour Thro' the Whole Island of Great Britain* (1724-7) 等により，18世紀中期の旅行文学隆盛へと進展を見た。従って，フィールディングによるユリアヌスの転生は，極悪非道な背教者に負わされた煉獄の苦しみの象徴である一方，英国読者層を念頭に入れた物語設定の一環と考えられる。

—V—

ローマ皇帝であった背教者ユリアヌスをギリシャ神話上のミノス，転じて冥府の裁判官の裁定に委ねて，世界各地を遍歴させる趣向から，紀行文の形式を登用した作者の便宜性が認められる。但し，ミノスのご都合主義，恣意的な解釈等から，フィールディングが敵対者達から“broken wit”とか“a corrupt justice”呼ばわりされたのも事実である。[20] 作者の宗教観や倫理性が問われるミノスの裁決ではあるが，仮に，厳然とした基準や尺度に則ることとなれば，ルースな物語の進展の狭間にあって，フィールディングが執筆断念に至るは

必定であろう。生半可な裁定であったればこそ，作者は自由闊達に筆を進めることが出来たのである。ミノスの裁定に勧善懲悪の厳密な施行を求めても，所詮無理なのである。ミノスの裁定の出鱈目さ，他に言葉を求めるなら，ミノスの自在さがユリアヌスの変身，ピカロの如き遍歴を可能ならしめたのである。[21]『あの世への旅』第1巻第10章から第25章にかけてのユリアヌスの試練の数々は物語り全体に占める割合から，ユリアヌスの遍歴の旅と称することも可能であろう。前半の中心人物である語り手は後半部では全く姿を消し，第24章でトロイの馬の詩をユリアヌスがラテン語で長々と語りだすのを押し止める端役にすぎない。第25章ではユリアヌスが次々と騎士や踊りの名手や英国の主教と変貌を遂げる顚末から，唐突にも第19巻第7章に飛び，『あの世への旅』は未完のまま結末を迎える。

最終章はアン・ブリンによる身の上話で，アン・ブリンとは不義の故をもって斬首刑の憂身を見たHenry 8世の2番目の妃で，エリザベス1世の母である。作為的な欠落に続く章として，ユリアヌスの物語の続編であり，前章同様，聞き手はミノスと「私」である。王妃が物語る半生は史実の裏話と言ってよく，ミノスは4年間の妃としての苛酷な試練に免じて，同妃に極楽浄土入りを赦す。作為的な欠落部に続く悲劇のヒロインに依る話は，ミノスの裁定により結末を迎え，巻末の本文脚注から，読者はタバコ等が故に続編が損なわれた事を知る。物語の進展の観点から，ユリアヌスからアン・ブリンへの移行には読者を納得させる必然性に欠け，継続性や文体の統一も充分とは言えない。それも道理で，第1巻第25章末に付された脚注から，アン・ブリンの章は他人の筆に依るとの驚くべき事実が判明する。18世紀当時の物語で脚注の登用は決して珍しく無く，リチャードソンも大いに活用した事が知られているが，『あの世への旅』の脚注は僅か数箇所に止まるとは言え，物語の展開を左右し，作者の創作意欲を示す指針と解釈可能である。店先に置き忘れられた原稿を，店主が包み紙に代用するとの陳腐な設定を採択した作者が，途中で物語の進展に苦慮する余り，脚注に依存したと考えられ，作者の

創作意欲が著しく減退した事は想像に難くない。その結果としての代筆者の介在は読者の興味を削ぐのも甚だしい。

—VI—

18世紀の西欧の人々にとって，冥途とは如何なる意味を持っていたのであろうか。極楽浄土への免罪符は，個々の宗派，信仰，民族，国家等の帰趨に依って，異なるものと考えられる。フィールディングが極楽浄土の意として用いた“Elysium”とは“the supposed state or abode of the blessed after death in Greek mythology.”(OED)であろう。サンスクリット語の“sukhavātī”は楽(sukhā)有(yakī)の意味であり，わが国にあっては，西方十万億の仏土をへた所に在る全く苦患無き安楽な世界と考えられ，〈阿弥陀経〉等にその全貌が詳しい。当時の英国にあって，フィールディングは如何に極楽浄土の概念を捉えたであろうか。伝記作家の精緻を極めた研究から論証されるかもしれないが，存外，彼の作品中に，その行間に込められているのではなかろうか。フィールディングの人生哲理や宗教観，さらには文化芸術観等を知る上で，『トム・ジョウンズ』等の各巻序章の重要性は指摘する迄も無い。宗教と哲学との相違に関し，フィールディングは同書第3巻第1章で次のごとく定義している。

> The former (philosophy) of these, teaching the folly and vanity of it, and the latter (religion), correcting it, as unlawful, and at the same time assuaging it by raising future hopes and assurances which enable a strong and religious mind to take leave of a friend on his deathbed with little less indifference than if he was preparing for a long journey; and indeed with little less hope of seeing him again.[22]

友人との別離に際し，宗教はその悲嘆を和らげ，将来の希望と保証を与えるものとするフィールディングの見解は，常識を逸脱するものでは無い。同様の観点から，次の箇所を問題としたい。『トム・ジョウンズ』第1巻第2章

で，Allworthy 氏は，3 人の我が子を幼くして亡くし，同物語りの始まる 5 年ほど前に最愛の妻との惜別を迎えたが，彼女との再会を信じて止まない。

> ... he looked on himself as still married, and considered his wife as only gone a little before him, a journey which he should most certainly, sooner or later, take after her; and that he had not the least doubt of meeting her again, in a place where he should never part with her more. Sentiments for which his sense was arraigned by one part of his neighbours, his religion by a second, and his sincerity by a third.[23]

上記 2 例の引用にある“journey”の解釈は，“死出の旅”の意で突飛な発想，解釈ではない。次に引用23にある“in a place”とは，朱牟田訳には“あの世”と見られるが，“あの世”とは死後の世界，来世を指すことが一般通念ではなかろうか。オールワージ氏が究極的に目指すのは，文脈からして“Elysium”に他ならず，“かの地”での夫人との出会いを信じて疑わない云々の意と解釈すべきであろう。分別や宗教心，誠実さが“かの地”での再会を信じるに不可欠と記されるが，衆生の罪を監視し，死者の罪を判ずるミノスの介在等は考えられない。フィールディングにとって，極楽浄土での再会劇には事欠かない。本稿 3 章でも挙げたが，『あの世への旅』第 1 巻第 8 章での語り手と亡き娘との感傷的な再会等から，フィールディング自身と伝記的な符号が指摘されよう。フィールディングによる『雑文集』に併せて編纂されている『親しい者を失った苦しさへの対策』は，フィールディングの別離を迎える心情，心構えを解く鍵となるのではないか。親しき者を失いし時の慰めは，あの世，否，かの地での再会を信じさせる敬虔かつ純朴な信仰に在り，高尚な哲理に依るのでは無い，とするのがその小冊子の論旨である。こうした点からも，『あの世への旅』には人間フィールディングの来世観，概念が具体的に表明されていると言えよう。

（本稿は1992年12月19日に「18世紀英文学研究会」例会にて“Fielding's *A*

Journey from This World to the Next—Minosの裁定を問う—"と題して口頭発表した内容に加筆・修正を施し，改題したものである。)

注

1 拙論，「Laurence Sterneの医学諷刺」，『同志社大学英語英文学研究』16（同志社大学人文学会，1977）

2 Wilbur L. Cross, *The History of Henry Fielding* (New York: Russell & Russell, 1963), 1:402; Simon Varey, *Henry Fielding* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986), p. 30; Richard Dircks, *Henry Fielding* (Boston: Twayne Publishers, 1983), p. 66; Morris Golden, *Fielding's Moral Psychology* (Amherst: The University of Massachusetts Press, 1966), p.125.
Duddenは古典形式を踏襲した贋作として，『あの世への旅』を一級の作品として評価している。
cf. Homes Dudden, *Henry Fielding: His Life, Works, and Times* (Oxford: Clarendon Press, 1952), 1:431.

3 Henry Fielding, *A Journey from This World to the Next*, ed. Claude Rawson (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1973), p.31.

4 *Ibid*., p.33.

5 Dudden, 1:444.

6 Fielding, *A Journey*, p.35.

7 James A. Work, "Henry Fielding, Christian Censor," *The Age of Johnson*, ed. Frederick W. Hilles (New Haven: Yale University Press, 1964), p.141.

8 Fielding, *A Journey*, p.35.

9 Henry Fielding, "Miscellaneous Writings," *The Complete Works of Henry Fielding*, ed. William Ernest Henley (New York: Barnes & Noble, Inc., 1967), 15: 273.

10 拙論，「Abraham Adams牧師の系譜—*Joseph Andrews*を中心に—」，『同志社大学英語英文学研究』41（同志社大学人文学会，1986）

11 Varey, p.34.

12 Fielding, *A Journey*, p.44.

13 Varey, pp.31-3.

14 Dudden, 1:432.

15 H. K. Banerji, *Henry Fielding: His Life and Works* (New York: Russell &

Russell, 1962), p.142.

16 G. M. Godden, *Henry Fielding: A Memoir* (London: Sampson Low, Marston & Co. Ltd., 1910), pp.154-5.

Pat Rogers, *Henry Fielding: A Biography* (London: Paul Elek, 1979), p.135. ロジャーズは，ディケンズがこの場面故に，『あの世への旅』を高く評価した事を紹介している。

cf., Frederic Blanchard, *Fielding the Novelist* (New York: Russell & Russell, 1966), p.399; Cross, 3:229.

17 Cross, 1:395.

18 Dudden, 1:432.

19 Thomas M. Curley, *Samuel Johnson and the Age of Travel* (Athens: the University of Georgia Press, 1976). p.53.

20 Cross, 3:136.

21 Lance Butler, "Fielding and Shaftesbury Reconsidered: The Case of *Tom Jones*," *Henry Fielding: Justice Observed*, ed. K. G. Simpson (London: Vision Press Ltd., 1985), p.57.

22 Henry Fielding, "The History of Tom Jones, A Foundling," *The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding*, ed. Fredson Bowers (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1975), pp.116-7.

23 *Ibid.*, p.35.

Synopsis

A Study of Henry Fielding: His Leading to the Fanciful Next World

Tatehiko Noguchi

Among those who have read *The Journal of a Voyage to Lisbon*, Fielding's posthumous work, there has been a growing conviction that his *Journal* presents any suggestions as to Fielding's view of death chiefly in its introduction. The *Journal* reveals how Fielding felt and spent his time on board, and how he passed his last days in the foreign capital, but this is not the first or final volume at all in which the author reflects upon his image of death. Upon careful analysis of Fielding's *A Journey from This World to the Next* published in 1743, about ten years earlier than the *Journal*, it may be concluded that the *Journey* was ingeniously written on almost the same theme suggested by the dialogues between the dead as the second-century Greek satirist Lucian took delight in writing. There appears reason to think that Fielding was careful in refraining from direct borrowing from Lucian in his *Journey*. The protagonist, who is a vague likeness of Fielding, makes a journey by land in a stagecoach from London, while the way to the entrance of Hades has been usually thought to be by boat over water. As the title of Fielding's *Journey* suggests, it elaborates for us how the narrator leaves for the other world and enters Elysium, the abode of the blessed after death in Greek mythology. The coach halts twice at the City of Disease and at the Palace of Death and finally reaches the banks of the River Cocytus. The conversations in the coach among the seven passengers about their diseases and treatments remind us of Fielding's satirical inclination against medical care and its ignorant practitioners of his time. After crossing the River by boat, every

spirit continues to travel on foot to the gate of Elysium where the spirits of dead people must be judged by Minos in respect of their behaviors on Earth; one is admitted to Elysium or consigned to the bottomless pit or sent back to Earth to try again.

Minos's judgments are so whimsical and partial that some contemporaries of Fielding's used to call him a broken wit or a corrupt justice, but they are brilliant in satirizing a parson or a soldier who resembles his certain unnamed contemporaries. Being admitted to Elysium at the end of chapter 7, the narrator meets his daughter whom he lost several years before, and relates his further adventures in Elysium, but of his meeting with Julian the Apostate in chapter 10, the narrator disappears in playing a part of a listener for the rest of the book. Fielding, as has been said, who aimed at maintaining his narrative, lost interest in recounting the metamorphoses of Julian as a slave, a wise man, a king and the like in chapters 10 to 25. As for the numerous accounts of a journey around the world made by Julian, it can be imagined that Fielding takes the popularity of travel book of his time into consideration in his descriptions of Julian's transmigrations. Furthermore, in terms of Julian's success in entering Elysium at last, Fielding transforms Julian into an English archbishop, Hugh Latimer of Worcester, to win the patronage of his eighteenth century English readers. What seems clear in the usage of the extraneous chapter following Julian's narrative, that is, Anne Boleyn's narrative in chapter 7 of book 19, is that Fielding, to excuse his unfinished volume and to pretend his work to be larger volume of a great man of letters, ends the story by adding a footnote to the effect that the rest of the book was totally destroyed in ruin. This is a very common literary device in his time. In the interpretation of Fielding's usage of Elysium, Hades and the next world in his *Journey*, one should bear in mind that Fielding, a Latitudinarian, has a kind of religious belief in hope of seeing the deceased again. As shown in his essay, "Of the Remedy of Affliction for the Loss of our Friends" compiled in *Miscellanies*, Fielding deems it worthy to offer a kind of advice to the public to prepare for a disastrous

end and to have the firm conviction of a future life and of reunion with the dead beyond the grave.